

星野靖二『近代日本の宗教概念 宗教者の言葉と近代』

有志舎，2012年2月刊，306頁，6,720円

森 康智

本書は「宗教」概念の歴史性に目をむけ「宗教」概念の近代日本における成り立ちを宗教者の自己理解の観点から研究したものである。宗教に固有の領域が超越性という局面との関わりにおいて求められるようになったこと，さらにそのような宗教の位置づけが道徳との関連において重要な問題であったことが明らかにされている。著者は現在國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所助教，ハーバード大学ライシャワー日本研究所客員研究員であり，本書は著者が2006年に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士学位請求論文をもとに大幅に改稿を加えたものである。

まず本書の構成を以下に示す

序 「宗教」概念を対象化すること

第一章 「宗教概念」の歴史性への視座

第Ⅰ部「文明としての宗教」

第二章 開花・宗教・キリスト教

第三章 「理学」と「宗教」—明治一〇年代における学問と宗教の位相—

第四章 仏教を演説する—明治一〇年代中葉における「仏教演説」の位相—

第Ⅱ部「文明から宗教へ」

第五章 尾崎弘道におけるキリスト教／宗教理解の構成

第六章 中西牛郎の宗教論

第七章 文明から宗教へ—明治一〇年代から明治二〇年代にかけての上村正久の宗教論の変遷—

第Ⅲ部「宗教と道徳の再配置」

第八章 道徳と宗教の位相

第九章 中西牛郎『教育宗教衝突断案』について—キリスト教の捉え直しと望ましい「宗教」という観点から—

第一〇章 『宗教及び文藝』に見る明治末期のキリスト教の一側面

結 「宗教」概念と宗教の領域をめぐって

このように全10章のうち，先行研究の整理と本書における研究の視座の提示に割かれた第一

章を除く 9 つの章が 3 つの部に大別される構成となっており、3 部はそれぞれ明治初年から明治 10 年代中葉まで、明治 20 年前後、明治 20 年代中葉を主な対象としている。以下、各部各章を要約する。

第一章では「宗教」概念を歴史性の中において捉え直すという本書の試みが、言語論的転回以後の知のあり方と呼応したものであるということがまず示される。言語論的転回により、ある概念は普遍の本質の表れではなく様々な契機を経て構成されたものであり、それゆえある概念についての考察もその本質へさかのぼるのではなくそれが言説として成立している場を射程に含めてその歴史を問うという系譜学的な視点による研究がおこなわれるようになったが、本書の研究はそのような系譜学視点にもとづいたものである。

さらに「宗教」概念に関する先行研究の概観を通して、近代日本の「宗教」概念ははじめより明瞭な輪郭を持つものとしてあったわけではないことが述べられる。特定の宗教伝統の内側から外側へ向けられた言説により、他の何ものにも還元されえないものとしてピリープ的側面を強く打ち出した自己理解が組み上げられ、「祭祀」や「治教」、道徳や教育などの隣接領域と切り分けられることで「宗教」という独自領域の外延が広く認められることとなった。

このように「宗教」概念は歴史的に構成されてきたものであり、この「宗教」概念を研究において分析概念として無批判に使用することがまず問い直されなければならない。しかし「宗教」概念の歴史性の問い直しによって西洋あるいはプロテスタント・キリスト教の影響が明らかにされることで、日本には従来の「宗教」概念では捉えられない特殊な宗教性があるという議論に向かうことには注意が必要である。そのような形で「日本的宗教性」という非歴史的なものを措定することは別種の本質概念を打ち立てることにほかならない。さらにこのような措定により近代的な「宗教」概念がもたらされてよりのちの歴史的变化が捨象されてしまうことも問題である。

第 I 部では明治初期に「宗教」がどのように新たに提示され、受容されたのかに焦点が当てられている。まず第二章では、明治初期の議論において「宗教」が文明と不可分なものとされていたことが植村正久や福沢諭吉、中村正直などの事例を挙げて論じられている。後に日本基督教会の指導的存在となる植村正久は、キリスト教を西洋のものであるという理由で受容する「卑屈」な態度を批判する一方、西洋諸国の発展をキリスト教と関係づけ積極的に評価しており、彼にとってキリスト教と西洋の関係は両義的なものであった。さらに『明六雑誌』の一部の論説に見られるように文明・開化という観点から功利的に宗教を論じ、キリスト教を歓迎するという言論状況も存在していた。このような文明と宗教を重ねて論じるという「宗教」理解は、19 世紀的な自然神学と結びついた形で明治初期日本にキリスト教をもたらした宣教師たちによって提示されていたものでもあった。このように提示されたキリスト教を当時の啓蒙思想家である中村正直は儒教的素養に基づいて理解し、開化と宗教が密接に関係しているとするという形で提示された当時のキリスト教を日本の伝統的知のあり方に連続するものとして解釈した。こうしてキリスト教は開化と不可分なものとして提示され、それが儒教伝統とつながる形で読み直されていくこととなった。

第三章では前章で明らかにされたようなキリスト教理解が、より抽象度の高い宗教そのものの理解にもある種の規定を与えたことについて高橋吾良（五郎）の宗教と理学（学問）に関する論を例として論じられている。高橋は学問が宗教の敵であるといった当時の新聞雑誌や演説における言説を批判し、宗教と理学の歴史的・特殊な現れ（「形」）における両者への批判はあっても、その非歴史的かつ普遍的な現れ（「事」）において両者は本質的に矛盾しないと主張した。高橋にとって正しい理学の営みは人間に安寧（「静泰艾安」）をもたらし、かつ「神に事える」ことにつながるものであり、さらに宗教と理学双方は神と等しい「造化主宰」により付与された「奇異ノ念」に淵源をもつもので、その意味で学問と宗教の両者は調和的で不可分であり究極的に一致するものであった。

高橋は宗教における「救い」の意義を積極的に評価していたが、超越性との思弁的ないし内面的関わりについての議論が前面に打ち出されていたわけではなく、実践的には人間の道徳的振舞いが決定的な争点となっていた。また高橋は「人性之理」を探求する朱子・王陽明を批判し外的世界への学問的探求である「天性の理」の探求を称揚するが、これは自律客観的ないわゆる近代的自然科学を志向したものではなく、外的世界の探求が必然的に造化主宰の存在を確認するものであるということを前提とした議論であり、その意味で学問はあくまで道徳論の枠組みの内であった。この高橋の論に見られるような宗教を知や理との、そして道徳との関わりにおいて語る言説が明治中期にかけてつよい影響力を持つようになり、このような宗教の主知的理解はキリスト教の弁証論から転じて他の宗教伝統批判や仏教の弁証論に用いられるという形で宗教そのものの理解を再帰的に組み上げていくこととなった。

第四章では明治10年代中葉における「仏教演説」を取り上げ、この必ずしも仏教伝統に積極的関心を持たない人々に仏教を語る試みにおいてこれまでに述べた宗教理解がどのように参照されたかが分析されている。仏教演説はその意図としては仏教の真理性の弁証であったが、その論においては個別の宗教伝統を総称としての宗教という同一の土俵にのせうえで「道理」を基準として評価する議論が枠組として存在していた。仏教の他の宗教、特にキリスト教に対する優位を論証するために仏教あるいはキリスト教を論じるという行為は、両者の比較のために「道理」を宗教一般に関わる評価軸として設定し、たとえば「修身」という徳目の遂行に関わる機能的な側面のみを両者から抽出して比較・議論するという傾向を生み出したのである。前章までで明らかにされたようにこのような「理」「道理」を争点とする論の枠組自体は同時代のキリスト教徒がキリスト教の真理性を弁証するために提示したものであり、その意味で両者の議論において総称としての「宗教」の位相は共有されることとなった。このような「道理」を問題とする宗教理解は自らの宗教伝統を知的に理解しようとする営みや、非合理的側面を削ぎ落としたところに宗教そのものを探求するような営みへとつながっていくこととなった。

第Ⅱ部では主に明治20年前後における議論を取り上げ、ここにおいて「宗教」を「文明」や「学術」からいったん切り離して、「宗教」に独自の領域を模索する試みが立ち上がり、「宗教」の本質を超越性との結びつきに求める議論が生まれたことが示されている。

第五章では明治期の指導的キリスト教徒の一人である小島弘道を取りあげ、彼の翻訳である『宗

教要論』と彼の自著『政教新論』の比較を通して「宗教」がどのようなものとしてとらえられるようになったかが考察される。『宗教要論』は J・H・シーリーの著作 *The Way the Truth and the Life* (1873) の抄訳であり、牧師であり教育者でもあったシーリーはこの著書において人類の物質的な側面における発展や精神的な側面の内の知識・道徳の進歩はそれぞれそのみでなされるものではなく、それらの中心に宗教があることで進歩が可能になるとの主張を行った。またこの論における「宗教」とは他の迷信習俗と混合せずに教勢を伸張させてきたキリスト教のことであり、その宗教的真理性ゆえにキリスト教のみが真理であるとされていた。小島もこのシーリーの主張を引き継ぎ、『政教新論』において、文明とキリスト教が不可分であるとの認識のもと日本の開化におけるキリスト教の必要性を述べるが、儒教については政教一致的側面を批判するものの真教たるキリスト教の前段階の「仮教」としてある程度の評価をしている。ここではキリスト教の真理性は他の宗教に対し排他的・攻撃的に提示されるのではなく他の宗教伝統を包含し、それを完成させるものとして位置づけられているが、このような複数の宗教伝統の間に段階的な連続性を想定するような思考様式は、総称的な「宗教」という共通理解の形成につながることであった。

第六章では、この時期における新しい仏教の弁証論の動きについて中西牛郎の議論を事例として取り上げ、井上円了の議論との比較が行われる。井上は哲学的立場からキリスト教を排撃し宗教に対する主知的理解のもと仏教を「智力の宗教」として称揚したが、ここにおける判断基準は真理・開明・国益といった項目であった。中西はこのような学知による宗教の弁証を否定し、「宗教」本質を超越性との関わりの側面に求めた。中西は宗教の二大要素として、人間の知的考究である「理哲二学」(科学と哲学)によって進歩する「自然教」と人間の知力を超越したものを感得する「顕示教」を挙げる。キリスト教も仏教もこの両側面をそなえたものであるが、一神教であるキリスト教に対して仏教がより高度な人間知性に適した凡神教であり、凡神教を基礎として超越性との交渉を取り扱う顕示教であるとされた。この中西の論において、結論としては仏教の優越性が弁証されているものの、異なる宗教伝統を宗教として同じ資格のもとに捉えるという思考の枠組みは個別の宗教伝統をそれぞれ宗教として中立的に比較するという宗教の学問的比較につながる態度であった。また中西は宗教の超越性との関わりに焦点を当てたが、宗教を人間知との関連で論じるという当時の思考様式の影響を受けており、その超越性についての理解は人間知と完全に切り離されたものではなかった。

第七章では、明治期の指導的なキリスト教徒の一人である植村正久を取り上げ、明治 10 年代から 20 年代にかけての宗教理解の変遷を論じる。明治 10 年代において植村はキリスト教と文明、宗教と文明は不可分のものとして捉え、正しい宗教は文明と調和するとの理解から無神論的進化論を否定し、正しい宗教であるキリスト教が日本に採用されることを希求した。しかしこの「文明の宗教」という理念的なキリスト教理解は彼の洋行体験によって揺るがされ、一方国内の風潮としてはキリスト教の伝統的・権威的な歴史的背景から自由であろうとする自由キリスト教が日本キリスト教界へ流入したことが日本における主体的キリスト教解釈の契機となっていた。このような状況下で植村は、日本の独自性を模索する当時の風潮とは逆に、文明と切り離された普遍的な宗教的真理性に焦点を合わせて宗教を論じた。植村は宗教の領域を超越性との交渉を取り扱う独自の領域として明確に設定し、その内にある全ての宗教に対して宗教として一定の価値を認めなが

らその「正邪眞假」の区別を行い進歩の図式を当てはめ整理した。このような植村の語り方は、これまで本書で明らかにされた明治10年代から20年代にかけての宗教を宗教として独自の領域で取り扱うための枠組みの模索という流れに沿うものとして理解できる。

第Ⅲ部では第Ⅰ部で論じられた「宗教」と「道徳」の関係が、第Ⅱ部でみたような「宗教」を超越性との関わりにおいて捉えるような枠組みの中でのように再配置されるのかについて、明治20年代中葉から明治後期を視野に入れて述べられる。

第八章では「道徳」と「宗教」の問題について、内村鑑三不敬事件や教育と宗教の衝突問題を中心に論じられている。明治23年、一高で行われた教育勅語奉読式において内村が「お辞儀」をしなかったことが不敬であるとされ過大に報じられたこの事件を契機として、キリスト教は日本の国体にそぐわず「安寧秩序」を妨害するものであるとして批判の的となった。これに関する議論において金森通倫はキリスト教徒の立場から、宗教と切り離された「礼式」は承認される（ゆえに敬礼すべき）と主張したが、この外形上の「礼式」と宗教を切り離すという立論の背後には、「君臣上下の義理」と規範が個別の宗教伝統内の規範より上位に存在するという思考様式があった。一方植村正久は「礼式」そのものを問題とし、そのような非文明的な習俗である礼式を強要することは「キリスト教徒の良心」・「人類の尊貴と文明」・「天皇への忠」に反することであると批判した。また国家主義や忠孝道徳を重視する井上哲次郎によるキリスト教が西洋の外教であるとの批判に対して、植村は「愛国」はそれ自体が目的ではなくより普遍的な神の「正義なる愛」の達成のために行われるものであり、それゆえに神への愛と国への愛は調和すると反論し、宗教とくにキリスト教を個人に主体的に道徳を実践させるものとして置いた。このように、植村は当時のキリスト教界の大勢が宗教と道徳は矛盾なく調和するとの見解をとるなかで一貫して宗教を道徳より上位に置いて論じたが、ここにみられる宗教と道徳の切り分けの議論は実践的には逆に宗教が道徳に奉仕するという形にもつながりうるものであり、このような形はその後の日本の歴史における民心維持のための宗教教育の活用という状況にもあらわれている。

第九章では、明治中期に仏教の立場から言論活動を行っていた中西牛郎による教育と宗教の衝突についての議論が紹介されている。中西はユニテリアンの活動を伝統的キリスト教の捉え直しの試みとして理解し、それを「宗教」のありかたとして肯定的に評価したうえで仏教においてもそのような捉え直しが行われるべきとの主張を行ったが、キリスト教はそのような捉え直しによって国体護持を妨害しない「日本的」なものとなるべきとされた。このように中西の議論において、全ての宗教伝統においてそれぞれ自律的な価値が見出されるものの、それらはいくまでも「国体主義」的な価値の下位に位置付けられるものであった。「宗教」という領域が独自性を持つと同時に「国体主義」の制約を受けるという二重性は、近代日本における「宗教」を考える際に重要なものである。

第一〇章ではこれまでの経緯を踏まえながら、もはや「宗教」とは何であるかという議論が積極的必要性を持たなくなった明治後期において、宗教者たちが自らの宗教伝統について反省的に思索を深めるようになったことについて、一九一一（明治四四）年創刊の雑誌『宗教及び文藝』や東京神学社、「宗教」を実存的に追求する若者などを題材に論じられている。この時期において

都市中間層を中心に自己の内面に問題を抱える若者が一定数存在しており、彼らはその実存的煩悶にたいする答を修養運動のなかでもより神秘主義的な方向に求めた。東京神学社やそれと密接に関連した『宗教及び文藝』には彼らにキリスト教の信仰とキリスト教の本質の学的探求を一体のものとして提示し、それを望ましいものとして受容した若者たちが同誌上において発信するという循環があった。この当時の「宗教」の探求は神秘主義的傾向のみでなくそこに反省的な把握が重ねられて存在していたのであり、「宗教」の学的探求と体験主義的思考が不可分のものとして結びついていた。この時期までに学術や道徳と切り離された「宗教」の独自の領域があるとの緩やかな合意があり、実存的な感覚がその「宗教」の領域に接続する有力な方法となっていたのである。このような実存的「宗教」との向き合い方は本書で明かされたような近代日本の歴史的展開の上に成立した態度であり、さらにそれは個別の宗教伝統内のみ関わるものではなく「宗教」そのものを反省的にとらえようとする試みにも関わるものであった。

以上で述べたように、本書では近代日本において「宗教」の概念がいかんにして歴史的に構成されてきたかについて詳細かつ明快に論が展開されている。第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部の区分も、それぞれの時期の特徴的性格を明らかにするのを助け、個別の宗教伝統の弁証や批判のために「宗教」という概念が「学問」「道徳」「文明」などの概念との関わりにおいて論じられ、超越性に「宗教」という領域の独自性が求められるようになる過程を整理している点で論の構成上適切であるといえる。また本書では植村正久・小崎弘道・中西牛郎といった仏教者やキリスト教の指導者による議論を中心に各章が構成されているが、このような宗教者による「語り」への注視は、「宗教」概念が単に外からそのまま導入されたものではなく、宗教者による理解・解釈、さらには彼らによる自らが信奉する宗教伝統の自己定義や他への提示といった多元的な営みによって歴史的に構築されたものであることを鮮やかに描き出すための有効な手法となっている。宗教者の自己理解に焦点を合わせ近代日本の「宗教」概念の展開を論じるという「序」において掲げられた目的は十分に達成されていると評価できる。さらに第九章で述べられる「宗教」という領域が超越性との関わりにおいて独自性を持ちながら国体主義の制約を受けるという二重性や第十章における実存的煩悶に対する主知的探求と神秘主義的志向の併存に関する論は、近代日本の「宗教」概念について考えるうえで非常に重要なものと思われる。あえて述べるならば、宗教者の自己理解に焦点を合わせるという本書の視座からいささか逸脱することかもしれないが、信仰実践においてどのように「宗教」概念が関わっていたか、当時の政府や政治家が「宗教」概念をどのように捉えまた利用していたかといった要素について筆者の手による論述があれば本書の論の意義がより深まるように感じられた。

本書は近代日本における「宗教」概念の黎明期を当時の宗教者の言説という側面から明らかにしているという点で、近代的な「宗教」概念の歴史性を問うという視座に関心のある読者にとって非常に興味深いものとなるに違いない。さらにそれだけでなく、そのような視座にこれまで関心がなかった、あるいは触れてこなかった読者にとっても、本書で明らかにされたような「宗教」という概念の文明・道徳・超越性といった問題との関わりにおける歴史的構築性を認識することは、なんとなく知っているつもりでの「宗教」について新たに考える絶好の機会となるであろう。